

序 説

1. 詩篇の聖書的位置付け

(1) 旧約聖書の中の位置付け

◆詩篇は、旧約聖書の4区分、①モーセ五書(創世記～申命記) ②歴史書(ヨシヤ記～エステル記) ③詩歌書(ヨブ記～雅歌) ④預言書(イザヤ書～マラキ書) の中の第3区分に属している。

(2) 救済史的理解による旧約聖書の構造(順列)

過 去	現 在	未 来
モーセ五書(創世記～申命記) 歴史書(ヨシヤ記～エステル記)	詩歌書(ヨブ記、詩篇、箴言、伝道者の書、雅歌)	預言書 (イザヤ書～マラキ書)

①神の救済計画は、「過去」⇒「現在」⇒「未来」という構造に並べられている。

②詩歌書の著者は、過去における神の救いの歴史を土台とし、未来に望みを置きながら、ある時は信仰と感謝をもって神を賛美し、ある時は不条理や敵の存在に疑いと動揺を抱きつつ嘆きをもって神に訴えながら、それぞれの時点における「現在の応答」をしている意味において、いつの時代においても「**現在性**」を持っている。つまり歴史における信仰者の断面を見ることが出来る。

③ルカの福音書24章44節では詩篇を含む詩歌書全体を「詩篇」と表現されている。

2. 詩篇の名称

(1) ヘブル語原典・・・「テヒリーム」

①「詩篇」はヘブル語では「たたえのうた」「賛美」(テヒリーム)と呼ばれている。

②「詩篇」の中身は苦しみや嘆き、感謝や教訓、王のためのとりなし、シオン賛歌など、さまざまな詩が集められている。「たたえのうた」に比べると「嘆きのうた」の方が多い。にもかかわらず、旧約の人々が詩篇全体をテヒリームとしたのには理由があった。それは、神による人生はどんなに多くの涙の谷を通過したとしても、必ず、神をたたえるうたを口にする日を迎えることができるという確信があったからである。

(2) **LXX**(70人訳)聖書・・・「プサルモイ」(複)「プサルモス」(単)

①「プサルモイ」(ギリ: $\phi\alpha\lambda\mu\omicron\iota$)は、ヘブル語の「ミズモール」(本来は楽器の伴奏に合わせて歌う歌を意味した)のギリシヤ語訳である。ヘブル語原典には約75の表題として「ミズモール」がつけられている。

②新約聖書ではルカの福音書20章42節、24章44節、使徒1章20節、13章33節等にこのことばが使われている。

③英語訳の **Psalms**(サムス)は、このギリシヤ語「プサルモス」から来ている。

(3) 日本語訳・・・「詩篇」

◆「詩篇」は独自の訳である。ヘブル語原典、**LXX** 訳からも来ていない。この訳は漢訳からきている。詩篇とは宗教詩の集められたものという意味である。

3. 詩篇の特徴と価値

(1) 詩篇には人の真実な体験が詳述されている

①詩篇のすばらしさは、神を信じる者が、信仰における自分の経験を述べ、その霊的生

詩篇の世界へようこそ

活の戦いにおいて起きた数々の事柄を赤裸々に述べていることである。たとえば、詩篇73篇では、神を信じない者が繁栄しているのを見て妬み、その結果、自分の足がたわみそうで、その歩みがすべるばかりであったこと、また自分が愚かでわきまもなく、神の御前で獣のようであったと語っている(2節、22節)。

- ②使徒パウロが「あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません」(1コリント10章13節)と述べているように、詩篇には人間が経験するすべて—希望、恐れ、疑い、信仰、絶望、裏切り、愛、落胆、孤独、その他もろもろ—が表現されている。それゆえにいつの時代であっても、詩篇に表されている多岐にわたる経験が自分の経験と共鳴し、そのことだけで慰められ、力づけられ、信仰が新たにさせられるのである。

(2) 詩篇はしばしば結論から始まっている

- ①詩篇73篇の冒頭1節を見よう。そこにはこの詩篇の結論が記されている。「まことに、イスラエルに、心のきよい人たちに、いつくしみ深い。」2節以降は、その結論に至るプロセスが記されている。
- ②詩篇106篇、107篇、118篇等、これらの詩篇の冒頭にくる定型句は「主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで」である。このフレーズは救済史における神の真実に支えられてきた神の民の結論的賛美なのである。
- a. Ⅱ歴代誌5章13節。ここにはソロモンが神殿を献堂するにあたって祭司とレビ人に「主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで」と賛美させたとき、主の宮は神の臨在のしるしである栄光の雲で満ち、祭司たちは立っていることができなかった。
- b. Ⅱ歴代誌20章21節。この箇所はしばしば霊的戦いのテキストとなっている。ヨシヤパテが聖歌隊に「主に感謝せよ、その恵みはとこしえまで」と賛美の声を上げた時、主は敵を打ち負かされたとある。一見すると、なぜこんなわずかの賛美のことばで敵を打ち負かすことができたのか疑問が起こる。しかしこのフレーズは賛美の結論的フレーズなのである。

(3) 経験が特定の真理の例証となっている

◆経験それ自体は価値あるものではないが、その経験が神について、特定の真理の例証となると大きな価値を有する。たとえば、詩篇73篇の結論は「まことに神は、心のきよい人たちに、いつくしみ深い」という真理であった。この真理の結論に作者がどのようにして到達したのか。その方法と過程(プロセス)が普遍的な価値を持つのである。つまり、作者は聖所に入って神の視点から物事を見たとき、この世の不条理を乗り越えることができたのである。「心のきよい人」とは神の視点からすべての物事を見ることができるとのことである。

4. 詩篇の主題

- (1) 詩篇の主題は、<嘆き>から<たたえ(賛美)>へ である
- (2) 詩篇全体の構造・・・全体は5巻にまとめられた賛美歌集と考えてよい。

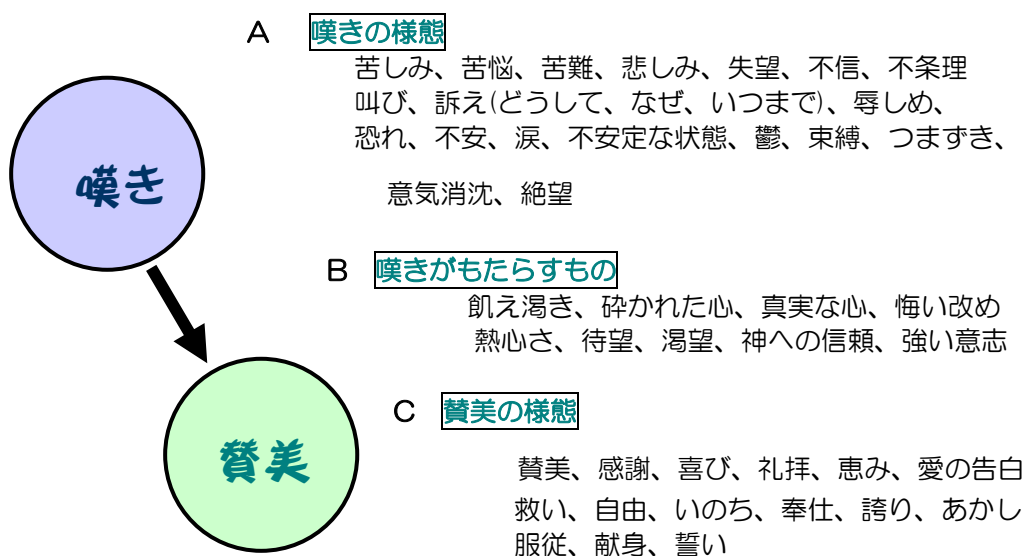
1 序言	41	42	72	73	89	90	106	107	150 結論
第1巻		第2巻		第3巻		第4巻		第5巻	

- ①詩篇の序言(第1篇)には「理想的人間」と「現実的人間」の姿がある。理想的人間とは「さいわいなことよ」(アシュレー)とあるように、神に対してまっすぐに歩むことである。そのような人は「何をしても栄える」のである。しかし、現実の人間の姿はそうではない。第2篇、第3篇を見ても分かるように、自分に逆らって立ち足はだかる

詩篇の世界へようこそ

人々や出来事が起こってくる。しかもそれがいかに大きなものであるかを記している。そこにあるのは人間の嘆きである。賛美がないわけではない。しかし現実には不条理における怒りや疑い、苦難における不安と恐れゆえに嘆く人間の現実がある。

- ②嘆きに満ちた人間が神の恵みによって祝福され、「何をしても栄える」人間へと変えられていく。そのような人がすることは、第150篇で結論付けられるように神をほめたたえることである。主の恵みに対しては溢れ出る応答としての賛美、それ自体が主から出たものである。それゆえ、詩篇全篇は、《嘆き》を通して「イスラエルの賛美の上に座しておられる聖なる主」をあかししているといえる。



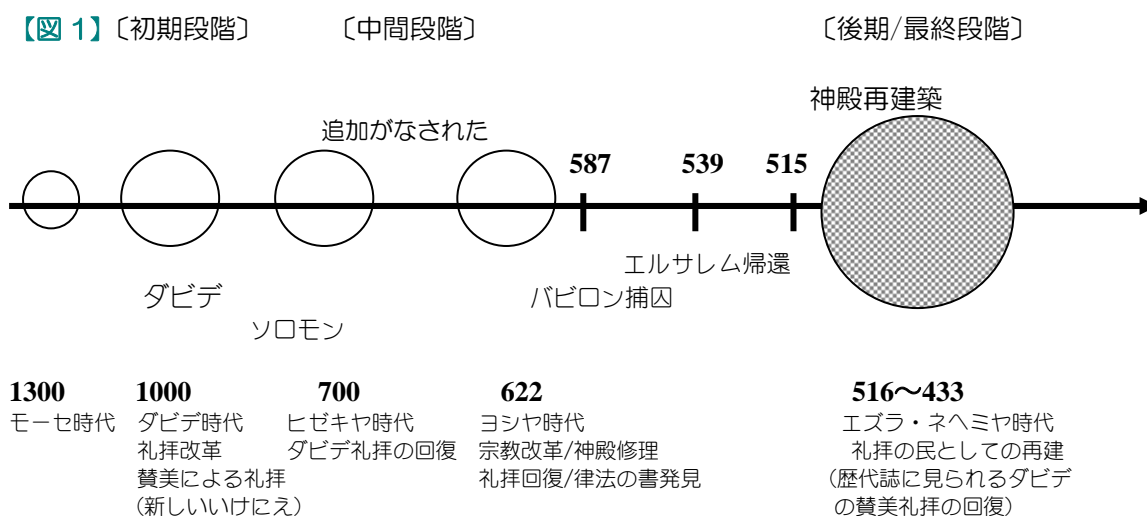
5. 詩篇の編集形成の過程

(1) 詩篇は5巻に分かれている

- ① そうした形に至るまでには何度かの編集作業を経たと考えられる。中にはダビデ以前のものもあるが、その多くはダビデの時代に集成されたものと思われる。またヒゼキヤ王やヨシヤ王の礼拝改革の際に補充され、捕囚後に現在の形に編纂されたと考えられる。この間、少なくとも6世紀の年月が費やされている。
- ② 詩篇は最終的には5つに区分されているが、それぞれの区分は頌栄(アーメン、ないしハレルヤ)をもって終わっている。
- 第1巻・・・1～41篇
 - 第2巻・・・42～72篇、
 - 第3巻・・・73～89篇
 - 第4巻・・・90～106篇
 - 第5巻・・・107～150巻

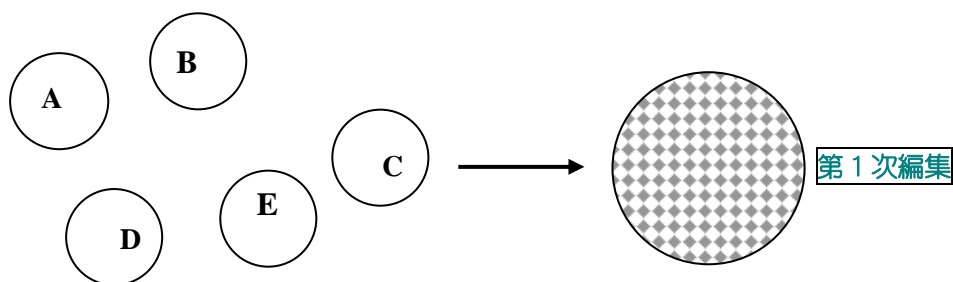
(2) 詩篇が5つに区分されたことについて

- ① ミドラシーム(エズラの時代以降、モーセの五書を解釈し説明したもの)は次のように述べている。「モーセはイスラエル人に五つの律法の書を与えたが、それらに対してダビデは彼らに五区分からなる詩篇を与えた」と。
- ② 近代のユダヤ人聖書注解者デリッチは「モーセの律法は神から民に語りかけられた五書であるとすれば、詩篇は民が神に語りかけた五書である」と述べている。



(1) 人名による編集

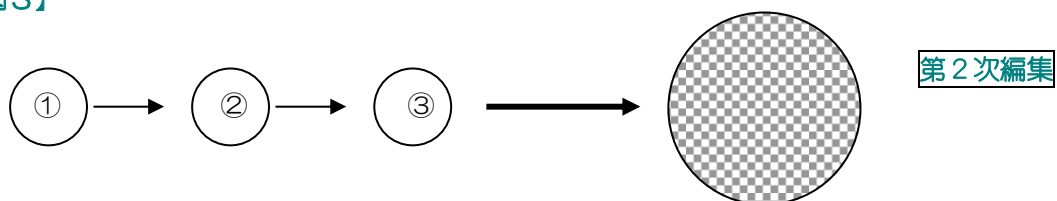
【図2】



- A ダビデ集** 第一集(3~41篇、ただし33篇除く) 第二集(51~72篇、ただし66、67、71、72篇を除く)
- B アサフ集** 50篇、73~83篇
- C コラの子集** 42~49篇、84~88篇、ただし86篇除く。
- D 都上りの歌** 120~134篇。
- E ハレルヤ集** 104~106篇、111~113篇、115、117篇、146~150篇。

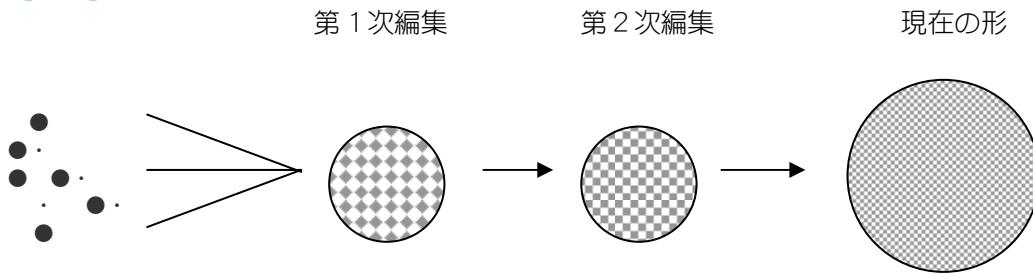
(2) 神名による編集

【図3】



- ①「神名ヤーウエ」集・・・ 1~41篇(ヤーウエ; 273、イロヒム 5)
- ②「神名エロヒム」集・・・ 42~89篇(ヤーウエ; 74、イロヒム; 207)
- ③「神名ヤーウエ」集・・・ 90~150篇(ヤーウエ; 339、イロヒム; 7)

【図4】



6. 詩篇のキリスト教会史における評価

(1) 初代教会

- ① 新約聖書に引用されている旧約文書の中では詩篇が最も多い。しかもその引用箇所はキリスト証言のためである。
- ② パウロは「詩と賛美と霊の歌」とにより、神に向かって歌うように勧めている(コロサイ書3章16節)。ここでいう「詩」とは詩篇のことである。ユダヤ的伝統がキリスト教会にも流れている。

(2) 中世ローマ・カソリック教会

- ① 修道院の聖務日課の中で、詩篇は毎日歌われた。ベネディクト修道院の会則には次のように定められている。「毎週150篇ある詩篇をすべて歌い、日曜の前夜の礼拝ではまた新しく歌い始めること。自ら誓約した礼拝において、詩篇全曲と慣習的に定められた賛歌を一週間で歌えないような修道士は怠惰だと見なされる。歴代の教皇たちは、この仕事を一日でこなしていたようだ。私たちがそれに比べるとだいぶ生ぬるいが、せめて一週間でやり遂げようではないか」と。
- ② 第二ニカイア公会議(587)は、詩篇を全部暗誦しなければ、司教に叙任されないことを規定した。またトレド第8公会議(653)では、「今後、詩篇の全部を暗誦しないものは高位の聖職に昇任することができない」という法令を公布した。このように詩篇を暗誦することは聖職に叙任される条件として要求されたのである。

(3) 宗教改革 プロテスタント教会

- ① マルチン・ルターは詩篇の価値を非常に重く見た。ルターは詩篇を「小聖書」と呼んだ。ルターは「祈りをささげる者はすべて詩篇を用いるべきであり、それを暗誦するほどなじまなければならない」と言っている。ルターはドイツ語による礼拝を始めたが、ルター自身の作によるコラール「神はわがやぐら」(讚美歌267)は詩篇46篇から取られている。また「深き淵より」(讚美歌258)は、詩篇130篇から取られている。
- ② カルヴァンはルター以上に、より徹底して詩篇歌を神を賛美する最上のものとみなした。それゆえ詩篇以外の讚美歌を認めなかった。カルヴァンとその後継者ド・ペザは「ジュネーブ詩篇歌」を完成させた。この詩篇歌を重んじる伝統は、今日、長老派の教会に受け継がれている。

(4) 日本のプロテスタント教会

- ① 『讚美歌』および『聖歌』には、唱える詩篇(交読文)と歌う詩篇とに編集されている。
- ② 『讚美歌』の歌詞が1節しか書かれていないのは、歌詞を完全に覚えて歌うことを提唱したカルヴァンの影響である。しかし『聖歌』では日本の実情に合わせて、す

詩篇の世界へようこそ

すべての節の歌詞が記されている。

(5) 現代の傾向

- ① 1980年以降、詩篇を用いた新しい「プレイズ&ワーシップ」が歌われるようになった。例)「主の教えを喜びとし」(詩篇1篇)「声高らかに歌え」(81篇)
「ただ一つ私の願い求めは」(27篇)「ハレルヤ神の聖所で」(150篇)
「威光・尊厳・栄誉」(96篇)
- ② 詩篇には実に多様な礼拝用語が用いられており、今日の《プレイズ&ワーシップ》の流れの中で見直されている。

7. 詩篇を学ぶ視座

(1) 「真の礼拝者としての嘆きと賛美」という視座

◆本講義では詩篇を通して、神の民がどのような状況の中で神を礼拝してきたか、しかもその礼拝表現がいかにも多様性に富んだものであるかに注目したい。ここでいう礼拝とは、単なる集会としての礼拝ではなく、神に対する神の民としてのライフスタイルとして、包括的な生き方を意味している。

(2) 真の礼拝者のモデルとしてのダビデ

- ① F.B.マイアーは「詩篇はダビデと共に始まった」と述べている。イスラエルの歴史においてダビデの果たした偉大な貢献は「礼拝の改革」である。特にその改革は音楽を伴う賛美礼拝である。モーセの幕屋礼拝に代わる新しい賛美礼拝を通して、イスラエルに神の臨在を回復し、イスラエルを最強の国とし、黄金時代をもたらした神の器である。ダビデは羊飼、詩人、戦士、指導者等、様々な面において優れているが、究極的には、彼は真の礼拝者としてのモデルである。
- ② ダビデは預言者サムエルを通して王としての油注ぎを受けたが、それからサウロ王による不条理な苦難がはじまる。荒野の十数年にも及ぶ訓練はダビデを真の礼拝者とするために必要な神の訓練であった。そこから珠玉の詩篇が生まれ出たのである。

8. 詩篇におけるダビデの源泉的位置とその根拠

(1) ダビデの源泉的位置

- ① 詩篇の表題によれば、73の詩篇がダビデの作となっている。その他、アサフが12回、コラの子たちが11回、ソロモンは2回、ヘマン、エタンがそれぞれ一回、モーセも1回、それに「みなしご」詩篇がある。このように圧倒的にダビデの作が多いが、これらすべてがダビデのものであるかどうか明らかではない。しかし詩篇においてダビデがその源泉的位置を持っていることは確かである。
- ② 「ダビデによる」とは、文字通りダビデ自身の作であると理解し得るとともに、文法的に「ダビデに献上された」「ダビデについての」「ダビデを偲んで」「ダビデの指示によって」とも理解し得る。
- ③ ユダヤ人の『タルムード』では、モーセ以後のすべての律法はモーセの定めたものとされ、知恵文学はソロモンの作というように、詩篇のすべてもダビデの作であるとされている。
- ④ 新約聖書において詩篇が引用される際には、当然ダビデの作であるという自明の前提に立って引用されている。例) マタイ22章43節、ルカ20章42節、・・・。

(2) その根拠

- ① ダビデは琴を奏でる音楽家であった(1サムエル16章18～23節、18章10節)。
- ② ダビデは詩人であった(1サムエル22章=詩篇18篇ははっきりとダビデが歌ったもの)
- ③ ダビデはダビデの幕屋で祭司とレビ人による聖歌隊を任命し、歌をもって神を賛美

詩篇の世界へようこそ

する礼拝を導入した責任者。そのダビデは聖歌隊のリーダーとしてアサフ、ヘマン、エタン(エドトン)を任命した(Ⅰ歴代誌 16章6節)。

- ④ 神によって王として選ばれ、油注がれた王である。
- ⑤ にもかかわらず、サウロ王の妬みによって、人生の様々な苦難を経験したこと。
- ⑥ その苦難の経験によって、人間性の深みを経験し得たこと。
- ⑦ 苦境において神を恐れることを学んだこと
- ⑧ 主の臨在を何よりも第一に求め続けた礼拝者であること(詩篇 16篇、27篇)。
- ⑨ 王として永遠の契約を与えられた神のしもべであること。
- ⑩ ダビデの根であるメシヤ(イエス・キリスト)を指向していること。

9. ダビデの生涯の概観

◆詩篇の世界を理解し、その中にある神の民の経験を共有するためには、それなりの知的背景が必要である。その一つはダビデの生涯の概観である。特にダビデの経験した10余年の荒野での生活、および<ダビデの幕屋>礼拝についての理解は詩篇を読む上で必須である。またイスラエルの歴史における神のストーリー(神の救いの出来事と、神のイスラエルに対する選びと契約に対する神の愛と真実)について、その概観を把握しておくことは必須である。

◆ダビデの生涯において、彼がやがてイスラエルの理想的な王となるための素地や神の訓練など、それぞれの段階においてそれなりの意味があるが、本講義においては、ダビデが全イスラエルの王となってから彼がしたこと注目したい。

- ① ダビデの少年時代
- ② ダビデの荒野時代(10余年間)
- ③ ダビデの王としての時代(40年間)
 - i. ヘブロン時代(7年間)
 - ii. エルサレム時代(33年間)
 - iii. 王位をソロモンに継承

(1) ダビデが王となって最初にしたこと

—それは「契約の箱」をエルサレムへ移設したことである。(Ⅰ歴代 13章参照)

- ① ダビデが全イスラエルの王となって最初にしたことは、エルサレムを攻略してシオンの要害を攻め取り、そこを全イスラエルの首都としたことである。その首都はダビデの町とも呼ばれ(Ⅰ歴代 11章1～5節)、全イスラエルの政治的、宗教的な中心地となった。
- ② ダビデが王となってしたこと第二は、長い間失われていた神の「契約の箱」をエルサレムに移転しようとしたことである。これは神の直接的な指示ではなかったが、その思いを神はダビデの心に入れていた。ダビデは「私たちの神の箱を私たちのもとに持ち帰ろう。サウル時代には、これを顧みなかったから」(13章3節)と民に呼びかけ、それを民との合意によって決行した。(Ⅰ歴代誌 13章1～5節)
- ③ ダビデは契約の箱をシオンの丘に運び、そこで毎日の日課として神への賛美礼拝が行なわれるように指示した。またギブオンにあるモーセの幕屋でも伝統的な礼拝に加えて、音楽を伴う賛美礼拝を行なうように指示した。(Ⅰ歴代誌 16章37～43節)

(2) 「契約の箱」の理解

◆ダビデが目指した礼拝改革を知る上で、「契約の箱」についての確かな理解をもつことは重要である。なぜなら、「契約の箱」は<モーセの幕屋>、<ダビデの幕屋>、および<ソロモンの神殿>に共通する<神の臨在>の象徴であり、その箱が置かれた〔至聖所〕は神のご自身の顕現とその御旨が啓示される「会見の場所」であったからである。モーセの幕屋における至聖所には、年に一度、大祭司のみが入り、贖いの蓋に血を塗り、イスラエルの民全体のための贖いをした。モーセだけは(後にモーセの後継者ヨシユアも)出入り自由であった。モーセの幕屋礼拝の中心は至聖所にある「契約の箱」であった。

10. <ダビデの幕屋>礼拝についての概観・・ダビデが目指した礼拝改革と詩篇

(1) 全く新しい形態の礼拝

① 契約の箱をだれも見ることができた

◆モーセの幕屋は大庭、聖所、至聖所とから成っていたが、ダビデの幕屋においては、聖所はなく、至聖所だけをシオンの山に移転させた。モーセの幕屋では、聖所に入る者は祭司に限られていた。至聖所に至っては大祭司のみ(他にモーセ)垂れ幕を通して入ることが許されたが、ダビデの幕屋では、垂れ幕はなく「立ち入り禁止」の看板もない。祭司もレビ人も民もみな契約の箱を見ることができた。これは主を礼拝する上で革命的なことであったのである。

② 賛美中心のいけにえがささげられた

(もっとも、契約の箱を運び上るときのみ、動物のいけにえもささげられた。)

③ 新しいいけにえがささげられた・・・このささげものこそ詩篇おけるいけにえである。

i. モーセの幕屋におけるささげものは動物や穀物であり以下のとおりである。

- a. 全焼のいけにえ(自発的)
- b. 穀物のささげもの(自発的)
- c. 和解のいけにえ(自発的)
- d. 罪のためのいけにえ(強制的)
- e. 罪過のためのいけにえ

ii. 詩篇においては、より霊的・精神的なものが強調されている。

◆ダビデは、形骸化したモーセの幕屋におけるこれまでの動物によるいけにえを中心とした礼拝形式を継承しながら、同時に、賛美を中心とした神の臨在を求める新しい礼拝を改革した。このダビデの礼拝精神は、後のヒゼキヤやヨシヤ王たちの礼拝改革、および捕囚後における神殿礼拝の回復の土台となった。そして新約時代の礼拝の指針ともなっている。

義のいけにえ	詩篇 4 篇 5 節	神との正しい関係を第一として生きること。
喜びのいけにえ	詩篇 2 7 篇 6 節	神に愛され、生かされている喜び。
感謝のいけにえ	詩篇 5 0 篇 1 4 節、2 3 節、5 6 篇 6 節、1 1 6 篇 1 7 節	神が具体的になしてくださったことに対する感謝の応答、感謝は神の栄光を輝かす。
砕かれた魂(悔いた心)のいけにえ	詩篇 5 1 篇 1 6 ~ 1 7 節	形式的なものではなく、真の悔い改めを伴ういけにえが求められる。
従順のいけにえ	詩篇 4 0 篇 6 節	「耳を開く」とは主人に対する従順のしるし。
進んでささげるいけにえ	詩篇 5 4 篇 6 節	神はすべて自主的なささげものを求められる。
全焼のいけにえ	詩篇 6 6 篇 1 3、1 5 節	全焼のいけにえは、献身と服従を意味する。

④ 聖書ではじめて「ハレルヤ」と賛美させたダビデ

◆ダビデは「レビ人の中のある者たちを、主の箱の前で仕えさせ、イスラエルの神、主を覚えて感謝し、ほめたたえる(ハレルヤ)ようにした」(I 歴代 1 6 章 4 節)とある。ハレルヤは新約時代においては常套句。黙示録の天上の礼拝では永遠に「ハレルヤ」と賛美する。

(2) 賛美礼拝に祭司とレビ人たちの登用

◆モーセの幕屋においては、祭司たちやレビ人たちは動物によるささげものに関わっていた。また幕屋の各部の管理責任を担っていたが、ダビデの時代においては、彼らに賛美のための楽器をもたせ、歌をもって、しかも喜びをもって歌わせた。彼らは毎日の日課として朝ごとに、夕ごとに、絶えず主をほめたたえた。(I 歴代 1 6 章 4 0 ~ 4 1 節)

(3) 賛美礼拝の指導者たちの存在

- ①三大賛美リーダーたち・・・アサフ、ヘマン、エタン(エドトン)の三人である。彼らはそれぞれレビ族の中の代表となっている。
- a. **アサフ**・・・グルシヨ族出身(ダビデの幕屋、後のソロモン神殿の賛美リーダー)
 - b. **ヘマン**・・・ケハテ族出身(ギブオンにあったモーセの幕屋の賛美リーダー)
 - c. **エタン**・・・メラリ族出身(ギブオンにあったモーセの幕屋の賛美リーダー)
- ②賛美リーダーはいずれも青銅のシンバルを用いて歌っている。

(4) 祭司たちの役割と配属

- ①祭司ベレヤとヤハジエルとは、アサフとその兄弟とともにダビデの幕屋で賛美のいけにえをささげた。
- ②祭司ツアドクとその兄弟たちはギブオンのモーセの幕屋で賛美と動物のいけにえをささげた。

(5)ダビデの幕屋の礼拝神学

①【主の臨在こそわがいのち】

◆ダビデは何にもまさって主の臨在を慕い求めた。詩篇16篇8節、11節。27篇4節参照。主の前に出て、他のすべてのことを忘れて主の御顔を慕い求め、その麗しさに浸る。本質追求。形式にとられない。神の真理の啓示にいつも開かれた態度を取ろうとする。新しい皮袋を備える心。

②【賛美の中に臨在される主】

◆詩篇22篇3節「・・・あなたは聖であられ。イスラエルの賛美を住まいとしておられます」。「賛美を住まいとする」とは、賛美を受けるにふさわしい(その価値を有する)方という意味である。ダビデの幕屋においては、音楽を伴う歌と祈りを通して、つまり、くちびるを通して告白され、宣言された。くちびるによるいけにえは、しばしば心の多様な感情的表現を伴った。これはモーセの幕屋での礼拝では乏しかったものである。

(6)「シオン賛歌」の詩篇

- ①シオンの地理的意味・・・シオンとは要害という意味。エルサレムそれ自体が難攻不落の堅固な要塞の町。東には険しい峡谷、南と西には外敵に対する砦が築かれていた。シオンは小高い丘であり、エルサレムの南西に位置している。そこにダビデは契約の箱を安置するテントを設置した。
- ②シオンの霊的意義・・・聖書では他の山々にまさってシオンの山が特筆される。その理由はただ一つ、そこにダビデの幕屋が置かれ、賛美による礼拝を通して神の臨在がそこに満ち溢れていたからである。
- a. シオンは神が選び(愛された)場所。(詩篇132篇13節)
 - b. 神はシオンの中に住まわれた。(詩篇9篇11節)
 - c. シオンは美しい所、全地の喜びの場所である。(詩篇48篇2、11節、50篇2節)
- ③「シオン賛歌」の詩篇・・・詩篇の中には「シオン賛歌」と呼ばれている詩篇がある(48、50、87、99、132～134、137、146篇)。ダビデが幕屋を張り、契約の箱を置いたシオンは、「神の都」「大王の都」「聖なる山」とも呼ばれている。そこは「麗しさのきわみ」(詩篇50篇2節)と言われている。神の都シオンは「全地の喜び」として、神の住まいとして神ご自身が選ばれた場所である(詩篇132篇13節)。神はシオンを祝福の基としてそこから祝福を注がれた(詩篇134篇3節)。やがて、シオンが神の都として全世界の中心として再建されるときが来る(102篇13、16、21節)。シオンが再建されるとき、すべての国が神の王国に包み込まれることが預言されている(87篇)。今日のシオンは何処にあるのか。シオンがエルサレムの中にあつたように、今日のシオンは教会の中にある真の教会である。

(7)「都上りの歌」と題された詩篇(120篇～134篇までの15の詩篇)

- ①「都上りの歌」という表題の意味・・・「上る」ということばについて、「聖歌隊が15の

詩篇の世界へようこそ

階段の上で歌った」という理解や、「バビロンからエルサレムへの帰還者のために作られた歌」、「歌の音階が上昇する音調の歌」、あるいは「三大祭の時にエルサレムに上る巡礼の歌」とも理解されている。しかしいずれも、これらの詩篇にはエルサレム、とりわけシオンに対する思慕、かつてのダビデの幕屋礼拝において現わされた神の臨在の栄光、かつての黄金のエルサレムを偲ぶ熱い思いがある。

- ②「都上りの歌」の背景には、バビロンの捕囚となった神の民がやがてエルサレムに帰還する喜びが感じられる。

1.1. イスラエルの歴史の概観と詩篇(神のストーリーを歌った詩篇)

◆詩篇の中には神のストーリーを歌ったものがある。そこには神の民の本来の姿を取り戻すべく革新を求めるものである。その場合の革新とは、神への反逆から回心して、イスラエルの出発点であり、またその規範となった出来事を回顧し、そこに立ち帰ろうとすることである。その回顧の基点となるのがアブラハム契約であり、出エジプトの出来事であり、あるいはシナイで神と民が結んだシナイ契約であったりする。その歴史の中に貫かれた神の選びの愛、そして契約に対する神の真実、恵みが告白されている。ある詩篇の中には繰り返した回顧がなされている。

◆以下の詩篇は神のストーリーを告白した詩篇である。**神の民が歴史の中で何を学んだのかが重要なのである。**

- ① 詩篇 78篇・・・出エジプトからダビデの時代までの神の忍耐とあわれみの深さ
- ② 詩篇 105篇・・・アブラハム契約に対する神の誠実さ
- ③ 詩篇 106篇・・・イスラエルの歴史における不従順と忘恩の罪に対する神のあわれみ
- ④ 詩篇 107篇・・・様々な危機に際して繰り返された神の恵みに対する感謝

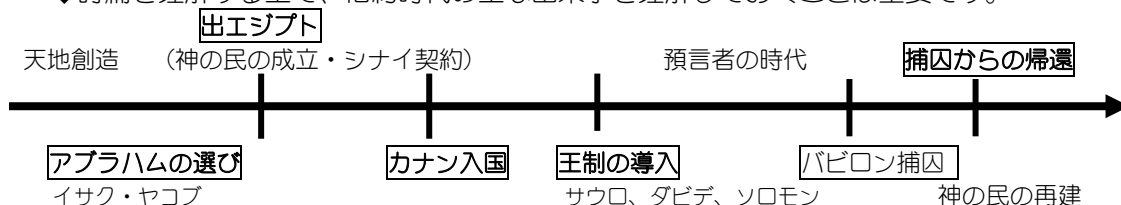
◆「**主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはどこしえまで**」という定型句は、歴史の中に貫かれた神の真実に対する賛美と感謝である。

A 【旧約聖書の概観】

モーセ五書 (創世記～申命記)	歴史書 (ヨシヤ～エステル)	詩歌 (ヨブ～雅歌)	預言書 (イザヤ～マラキ)
主題 <神の民の確立>	神の民の歴史的展開	人から神へ	神から人へ
創・・・神の民のはじまり 出・・・神の民の成立 シ・・・神の民の聖別 民・・・神の民の訓練 申・・・神の民の自立 (主體的決断)	①失敗に至る歴史観 (ヨシヤ記～列王記) 二大危機 a. 土地の賦与 b. 王制の導入	—歴史の断面— 不条理な現実への問い (ヨブ、伝道)と知恵(箴言) 嘆きから賛美へ (詩篇)	—神の民の在り方から逸脱した王、および民に対する神の声— さばきと回復の預言 いす
<神の民の特権> ①神の所有の民(神の愛) ②祭司の王国(隣人愛) ③聖なる国民(神への愛)	②回復に向かったの歴史観 (歴代誌～エステル記)	愛の交わり(雅歌)	

B 【旧約時代の主な出来事】

◆詩篇を理解する上で、旧約時代の主な出来事を理解しておくことは重要です。



本論 1

1. 嘆きを通り抜けた賛美

◆序説において、詩篇の主題を<嘆きから賛美へ>とした。さまざまな苦しみ、悲しみ、失望、不条理、恐れなどをかいくぐって生まれた賛美は、まさに真珠ができる行程と似ている。この主題の典型的な詩篇として、ここで詩 22 篇を取りあげたい。この詩篇は極限の苦しみの中で、神を賛美する者へと変えられた者の勝利が語られている。まさに、詩篇の主題を代表する詩篇といえる。

2. 詩篇 22 篇の構造とコンテキスト(前後の文脈)、メシア的詩篇

(1) 構造

◆詩 22 篇は明確に<嘆き>と<賛美>からなっている。そして詩 22 節の箇所は「賛美の誓い」がなされている。実は、ここに信仰の偉大な転換点がある。

V.1	V.21	V.22	V.23	V.3 1
嘆き		賛美の誓い	賛美	

(2) コンテキスト(前後の文脈)

◆詩 22 篇、23 篇、24 篇を一連のメシア的詩篇^{注1}と考えることができる。なぜなら、これらの詩篇にはメシア的預言の成就としてのイエス・キリストが示されているからである。この詩篇 22 篇、23 篇、24 篇は、それぞれイエス・キリストの過去、現在、未来の御姿を表わしていると考えることができる。

22 篇	過去	主の死	良い羊飼いがいのちを捨てる	キリストが十字架の苦しみを忍ばれたこと
23 篇	現在	復活の主の恵み	良い羊飼いが与える恵み	キリストがこの世においていのちを与え下さること
24 篇	未来	昇天された主の栄光	良い羊飼いの後の栄光	キリストの天における地位、あるいは千年王国における王としての地位

◆いずれもダビデの作である。詩 22 篇は主イエスの十字架の苦しみが描かれている。そして、詩 23 篇では「主は私の羊飼い」(1 節)とあるように、主の民の歩みを導かれる羊飼いとし

注1 ◆詩篇の中にメシアについての記述を見つけ出すことは、実にエキサイティングなことである。イエスご自身が次のように言われた。「わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇に書いてあることは、必ず、成就する。(ルカの福音書 24 章 44 節)と。そして、イエスの時代より 1000 年も前の記述に、メシアについての記述をはっきりと見ることができる。「メシア的詩篇」として覚えられるのは、2, 8, 16, 22, 24, 40, 41, 45, 68, 69, 72, 89, 102, 110, 118, 132 篇などである。「など」というのは、部分的にメシアについての記述が含まれるため、それを認めて「メシア詩篇」に加えるかどうかは多分人によって違ってくるからである。したがって、上記した 〃 の以外にも、メシアについての記述を見つけることができるはずである。

◆2 篇—メシアの職務上の栄光、40 篇—メシアの受肉(来臨)、91 篇—荒野の試み、41 篇—ユダの裏切り、69 篇—メシアの苦難、22 篇—メシアの十字架での苦しみ、16 篇—埋葬・復活・昇天、68 篇—キリストの昇天、45 篇—王なる花婿、24 篇—栄光の王、110 篇—祭司・王・さばき主、8 篇—最後のアダム、72 篇—千年王国におけるキリストの支配、89 篇—メシアの王座の永遠を神が誓う、132 篇—ダビデの王座の永遠の世継ぎ、102 篇—変わることはない御方、118 篇「ハレル」の結び・・・これらを見ると、イエス・キリストが単に 2 千年前にこの地上に現われただけのお方ではないことがよくわかるのである。

での主のことを示している。さらに、詩 24 篇では、栄光の王として地上を支配される主イエス・キリストの御姿が描かれている。「手がきよく、心がきよらかな者、そのたましいがむなしいことに向けず、欺き誓わなかった人」(24 篇 4 節)が王とともに治める平和な時代がやってくる。

(3) メシヤ預言としての詩篇

- ① 詩 22 篇がメシヤ詩篇と呼ばれるゆえんはなににか。それはその苦しみが自分の罪のゆえのものではなく、不条理な、理由のわからない苦しみの深刻さが描かれているからである。しかも、この詩篇の最初の節、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」というフレーズは、イエス・キリストが十字架上で叫んだことばであった。
- ② この詩篇には、十字架の光景が細部に至るまで描かれている。そして身代わりの死が全世界にもたらしていた結果が記されている。その広さと深さは、同じくキリストの死について記しているほかの詩篇(40 篇、69 篇 118 篇)よりもまさっている。
- ③ メシヤに関する称号・「私は虫けらです」(22 篇 6 節)の「虫けら」ということばは、しばしば「緋色」「紅」と訳される。つまりある虫を殺し、押しつぶすことによって、その血が鮮やかな、色あせることのない深紅の染料となる。「私は虫けらです」というのは、押しつぶされて死ななければならなかったメシヤの恥辱を預言している。

3. 詩篇 22 篇の「嘆きのうた」

(1) 「わが神、わが神、どうして私を」のフレーズ

- ① 主イエス・キリストが十字架上で語った七つのことばのうち、真ん中に位置する叫び。おそらく、主イエスは十字架上でこの詩篇全体を想起されたに違いないとする(バックストン、内村鑑三)。
- ② ユダヤ人の習慣によれば、一つの詩篇の第 1 節を唱えることは、その詩篇全体を唱えることになるという。

(2) 信仰を表わす「どうして」という問い

- ① 詩 2 篇 1~4 節に見られる<天的現実> - 「なぜ国々は騒ぎ立ち、国民はむなしくつぶやくのか。地の王たちは立ちかまえ、治める者たちは相ともに集まり、主と、主に油注がれた者とは逆らう。『さあ、彼らのかせを打ち砕き、彼らの網を、解き捨てよう。』天の御座に着いておられる方は笑う。主はその者どもをあざけられる。」 - にもかかわらず、「どうして」の<地的現実>がある。それゆえ、沈黙を続ける神に向かって、耐え切れぬ叫びが、詩篇では「どうして」「なぜ」「いつまで」という句で反復される。
- ② 「どうして」「なぜ」「いつまで」は嘆きの表現のことである。聖書は、理想的な姿だけを記しているのではなく、人間のありのままの姿を描いている。しかし、「どうして」という嘆きはのろいではない。信頼がその根底に存在する。もし信頼の絆が断ち切られているならば、「どうして」という問いすら失ってしまっているはずである。
- ③ ダビデは若くして、預言者 サムエルを通してイスラエルの王となるべく任職の油を注がれた。しかし、それからダビデの苦悩は始まった。自分の罪ゆえでなく、サウル王の嫉妬による執拗な殺意によって、ダビデは 10 余年の間、追跡され、その結果、荒野をさまようことになる。「どうして」「なぜ」「いつまで」・「昼も夜も重くのしかかる問い。長引く苦難の中で、神が遠くに感じられるような日々の中で、どんな状況の中でも神を信頼するかどうかのテストであった。

(3) 嘆きの諸相

- ① 神に「見捨てられ」「忘れられる、置き去りにされる」という絶望的な苦しみが見られる。1 節。
- ② 人々から「そしりを受け」「さげすまれ」「あざけられ」「嘲笑され」ている。6~8 節。
- ③ 助ける者がだれひとりとしていない。孤立無援の状態。11 節。

④ 苦しみの極限

- a. 詩 22 篇の表題には「暁の雌鹿」の調べとある。旧約聖書(特に、雅歌)では、主が「鹿」にたとえられている。鹿は外敵から身を守る術のない動物である。それゆえ、鋭い臭覚と逃げ足の速さで生き残るしかない動物である。雌鹿の敵は多い。詩 22 篇では、雌鹿の敵である動物が四つ記されている。
- b. 「バシヤンの雄牛」「犬」「獅子」「野牛」という表現によって、肉体的・精神的暴力がいろいろな形で加えられている。ダビデはさまざまな苦難にあったが、11~12 節までは、自分でも恵家かしない極限的な苦しみが記されている。ここでメシヤの苦難が預言的に啓示されていると言える(14, 18 節)。この極限の苦難にありながらも、なおも神に信頼する。ここに信仰者としてのすばらしい姿を見る(19~21 節)。

(4) 信仰の戦い

ダビデは昼も夜も神に叫ぶが、その叫びは空しく跳ね返ってくる。しかしここで終わらなかつた。ダビデは嘆きをもたらず状況と迷いの中で、信仰の戦いをしている。

- ① 告白・・・「しかし、あなたは聖であられ、イスラエルの賛美を住まいとされる方」と。
ここでダビデは神がどのような方であるかをはっきりと告白している。
 - a. 感情や気分によって賛美するのではなく、意思をもって賛美することを教えている。
 - b. 神が「聖である」との告白が意味するものはなにか。
- ② 想起・・・神の民の歴史における神の真実を想起している。(4~5 節)
 - a. 先祖との同一化。「神に信頼した時、決して恥を見ることはなかつた」ことを想起
 - b. 信頼→ヘブル語の「パートフ」とは、大の字になって無防備で地面にころがることを意味する
- ③ 確認・・・ダビデは自分の存在のルーツや目的を確認する作業をしている。(9~10 節)
 - a. 神とイスラエルの先祖の関係⇒神と自分との関係、過去の問題⇒現在の問題。
 - b. 神は「私を母の胎から取り出された方」(母の乳房により頼ませた方)
 - c. 自分が何のために生まれてきたのか? 何のために生きているのか? という実存的な問い。この問いの答えが見出せないとき、人は死を選ぶか、刹那的な生き方を選ぶようになる。
 - d. 神の選びの中にある自己の確認。神に選ばれて神を選ぶという主体的な生き方。

4. 詩篇 22 篇の「賛美の誓い—I will praise」について

◆このように、ダビデは嘆きの中で、神と自分とに対話し、その関わりを深化させている。苦難の中でダビデは、信仰の戦いを繰り返しながら、その行き着くところは「あなたは私に答えてくださいます」という確信であった。そしてダビデは<賛美の誓い>をするのである。

◆ダビデは賛美が好きだから、賛美をしたのではなく、賛美の誓いを主にしたので、賛美したのである。しかも「(大きな会衆の中で)(22 篇 25 節、35 篇 18 節、40 篇 9~10 節、等)、「あらゆるときに」、「いつも、どんな時にも」主を賛美する誓いを立てたのである。^{注2}

注2 ◆個人的な経験において、祈りの困難を覚える時、人はたやすく不信や失望に陥らないようにしなければならない。実は、詩篇 22 篇の作者もそのように感じたのである。この詩篇の作者は、祈りに関して三つの困難を覚えた。その第一は、祈っても神は傍にいと感ずることができなかったこと。第二に、苦悩から助け出されなかつたこと、そして第三は、祈り続けても何も生じなかつたこと、の三つである。それから、彼は、祈りに関するこのような経験は、歴史において初めて自分に生じたものではないことに気づく。「私たちの先祖は、あなたに信頼し、あなたは彼らを助け出されました。彼らはあなたに叫び、彼らは助け出されました。彼らはあなたに信頼し、彼らは恥を見ませんでした。」と告白している。作者は、あらゆる時代の先祖たちが残した「祈りは力である」というあかしの蓄積を知る。それゆえに、彼は、賢くも、数ヶ月間の個人的な失敗を、幾世代の民族の経験を無視して考えることは愚かであるという結論に至ったのである。そしてすべての人にとって、祈りはどのような意味をもっているかを考えた末、祈りに関する問題は、おそらく自分自身にあるのであって、祈りそのものにあるのではないことに気がつくのである。そこで彼は、できることならば、祈りの意味を明らかにしようと努力し、21, 22 節において、「・・・あなたは答えてくださいます。私は、御名を私の兄弟たちに語り告げ、会衆の中で、あなたを賛美しましょう。」という誓いを立てる。(フォスディク著『祈りの意義』第二章より)

嘆きから賛美への「転換点」としての<賛美の誓い>
「あなたは私に答えてくださいます」(21 節) ●この部分は、口語訳聖書も新共同訳聖書も省かれている。
「会衆の中で、あなたを賛美します。」(22 節)・・・「答えてくださるので」(理由) 「会衆の中で、あなたを賛美しましょう。」(22 節)・・・「答えてくださるなら」(条件) ◆この転換点を境に、作者の心はがらりと変化する。

5. 詩篇 22 篇の「賛美のうた」

(1) 賛美の広がり

◆一人の一人嘆きが、今や、個人を超えて賛美のうたとなって広がりを持つようになる。なにも状況が変わらずとも、主への信頼によって、嘆きが賛美へと変えられたのである。

(2) 賛美の内容

- ①「主は悩む者の悩みを、さげすむことなく、いとうことなく、御顔を隠されもしなかった。むしろ、助けを叫び求めたとき、聞いてくださった。」(24 節)
- ②「大会衆での私の賛美は、あなたから出たもの」(25 節)
 - a. 主の恵みに対するあふれ出る応答としての賛美は、非作為的性格を有す(岡本民子)。
 - b. 詩篇 150 篇には、「すべて生きるものよ。主をほめたたえよ」と命じられている。天使たちも、世界が造られたときから神の創造の神秘を賛美している。しかし、彼らに歌えない賛美がある。それは贖いの歌である。贖いの歌は、救われた者にしか歌うことができない。ここに賛美の大きな特権と使命があるといえる。

(3) 賛美のうたにおける告白

- ①「王権葉主のもの」(主は主権をもって国々を治めておられる方)
- ②「やがてすべての者によって礼拝されるべき方」(27～29 節)

(4) 「賛美のうた」における賛美の誓い

◆「人々の前で、私の誓いを果たします。」(25 節 b)

6. 詩篇の分類

◆ところで、詩 22 篇では<嘆き>を通り抜けた<賛美のうた>を見てきた。詩篇には純粋に嘆きだけのものもあれば、反対に、純粋に神をたたえる賛美や感謝の歌がある。そうした分類は、いろいろな学者たちによってまちまちである。

◆一つの立場や見方に縛られ、固定される必要はまったくない。確かに、それぞれの立場の分類に従って詩篇を味わうとき、ある意味で違った観点から目が開かれるということがあるかもしれない。しかし、詩篇を味わう上では、そうした分類は不要かもしれない。一応、詩篇に見られるいくつかの分類を紹介しよう。以下の類型を参考にするとよい。あえて具体的な詩篇を記さない。

- (1) 嘆きのうた (a. 個人、b. 共同体)
- (2) 感謝のうた (a. 個人、b. 共同体)
- (3) 賛美のうた (a. 個人、b. 共同体)
- (4) 信頼のうた (a. 個人、b. 共同体)
- (5) 礼拝への招きのうた
- (6) 教訓的なうた
- (7) 王をたたえる歌 (a. 神に立てられた地上の王のためのとりなし、b. 神ご自身を王として)
- (8) アルファベットのうた
- (9) 悔い改めのうた
- (10) みことばをたたえる歌 (11) シオン賛歌 ……などがある。

本論 2

1. 嘆きのうた

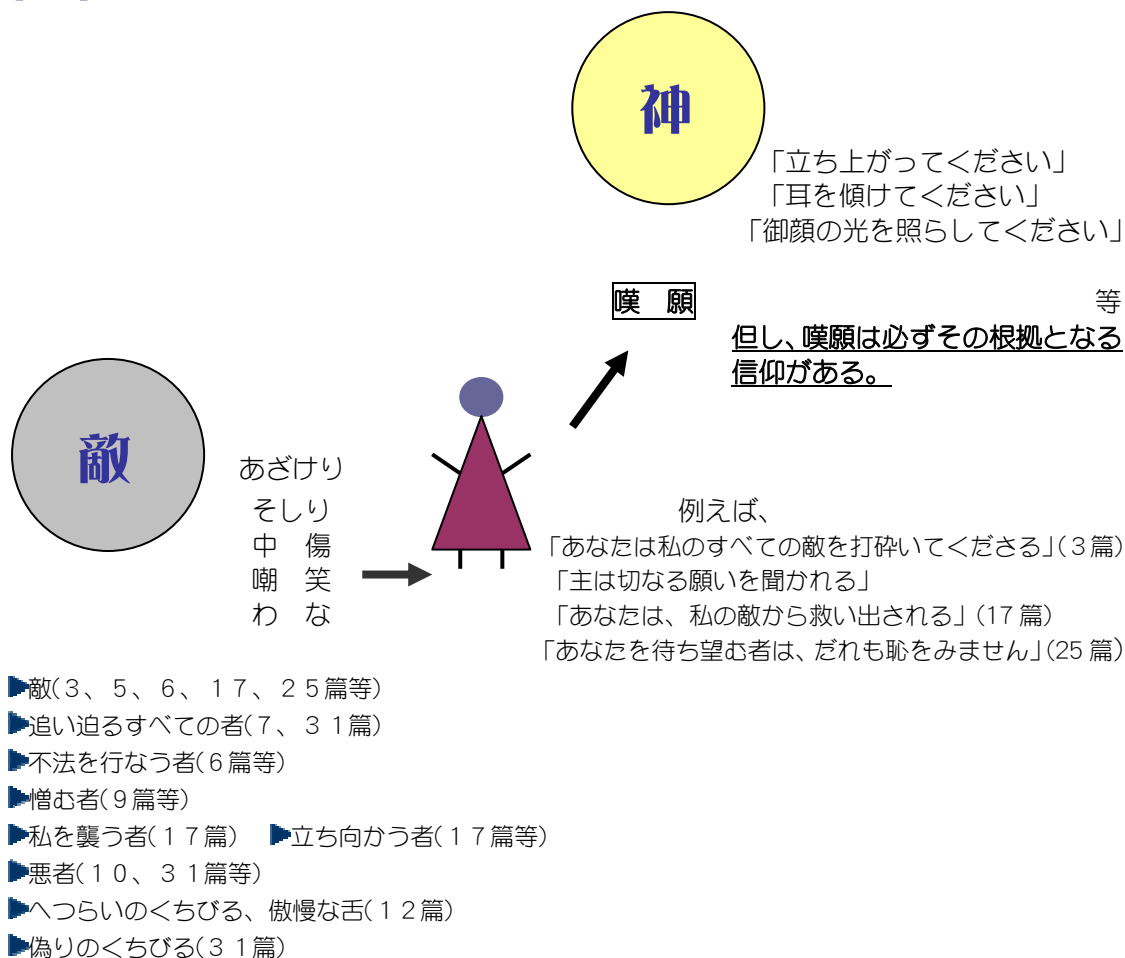
◆前回、詩篇の主題「嘆きから賛美へ」の典型的な詩篇として22篇を取り上げたが、今回は詩篇の中でも圧倒的に多い《嘆きのうた》を取り上げ、その諸要素をあげ、すべての要素が含まれる典型的な詩篇として第51篇を取り上げたい。

2. 嘆きのうたの諸要素

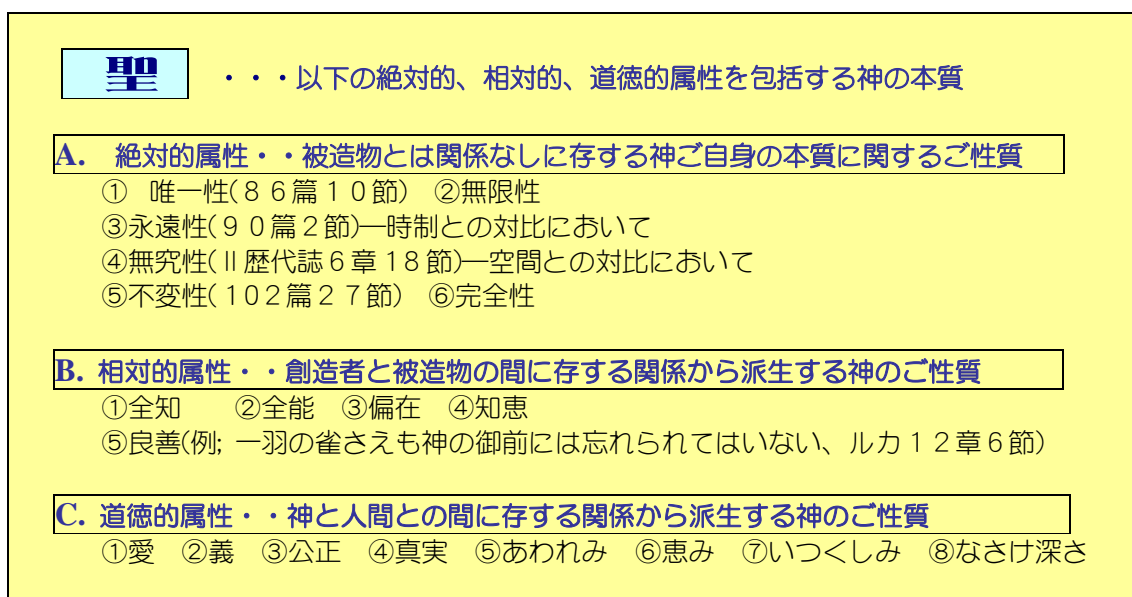
◆以下の表はあくまでも構成要素であって、必ずしもその構成順というわけではない。
◎○△は頻度を表わす。

◎	A. 【呼び掛け】	①「主よ」「私の神」「私の王」「私の～の神」 ②「わがたましいよ」(42篇5、11節)
◎	B. 【嘆願】	⇒嘆願の構図・・・【図1】参照
	(1)嘆きの表現形態	①嘆願 i. 「・してください」 ii. 「・しないでください」 ②問い i. 「なぜ」 ii. 「いつまで」 iii. 「どうして」 iv. 「なんと」 ③行為 i. 「祈っています」 ii. 「身を避けています」 ④緊迫性 i. 「急いで」 ii. 「早く」
	(2)嘆きの状況(背景)	①外的状況の説明 例:「私に立ち向かう者が多くいる」 ②内的状況の説明 例:「私は衰え果て、私の涙で、夜ごとに寢床を漂わせ、いらだちで衰え・・・弱まりました。」
	(3)嘆きの目的(理由)	①「・・・することがないように」 ②神がその状況を受け入れる方ではないゆえに
	(4)嘆きの根拠	●神の属性に訴える。例:神の属性に訴える (例 主の恵みのゆえに)「あなたの義のゆえに」)【図2】参照
◎	C. 【告白】	
	(1) 罪の告白 (2) 信仰の告白 (3) 回想 (4) 告白の行為	①「あなたは・・・(私の)・・・方です」(人格) ②「あなたは・・・(私に)・・・してくださる」(みわざ) ●神がかつてどのようにしてくださったかを回想する ●礼拝行為を表わす様々な表現(例:「ひれ伏します」「待ち望みます」「拠り頼みます」「呼び求めます」「愛します」等)
○	D. 【再度の嘆願と確信】	
○	E. 【賛美の誓い】	●「主に(を)、私は・・・しよう」(I will) 意志的に
△	F. 【とりなしの祈り】	●例:「あなたの祝福があなたの民にありますように」「こうして、・・・みな・とこしえまでも喜び歌いますように」 「あなたを誇りますように」
△	G. 【命令】	●例:「主の聖徒たちよ。・・・せよ!」

【図1】嘆願の構図



【図2】神の属性



3. 詩篇51篇にみる嘆きの要素、および釈義

- ◆ [表題について] ダビデの生涯における罪と悔い改めの深い経験がみられる。Ⅱサムエル 11、12章参照。ダビデはこの詩篇において「自分の心にある罪からのきよめ」を求めている。

(1) 呼びかけの対象

- ① 「神よ」(1、10、17節)、「私の救いの神よ」(14節)、「主よ」(15節)
- ② わずか19節の中に「私」と「あなたの」の関係が異常に強く結び付けられている。「私」(38回)、「あなた」(47回)。

(2) 嘆 願

- ① 嘆きの表現
 - a. 「私のそむきの罪(ベシヤ; 神の権威に対する意識的な反逆)をぬぐい去ってください」(1節b)
 - b. 「私の咎(アウオン; 不義)を、私から全く洗い去ってください。」(2節)
 - c. 「私の罪(ハッター; 神の道を見失うことからくる罪過)をきよめてください。」(2節)
- ② 嘆きの根拠 a. 「恵み」(ヘセド・・契約の愛) b. 「豊かなあわれみ」(1節)

(3) 罪の告白と信仰告白

- ① 罪の告白
 - a. 「まことに、私は自分のそむきの罪を知っている」(3節)
 - b. 「私の罪は、いつも私の前にある」(3節)
 - c. 「私はあなたに、ただあなたに罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行なった」

◆ダビデの告白は、たとえ彼が姦淫の罪を犯し、ウリヤを殺害しなかったとしても、私はいつでもそのような罪を犯す可能性をもっているという告白である。これは原罪であり、罪の腐敗性の自覚である。パウロの認罪はローマ書7章15～24節参照。

◆ローマ書1～3章で扱っている罪は《行為の罪》(複数)である。5章後半から扱っている罪は《原罪》(単数)である。前者はイエス・キリストの十字架の血潮によって赦され、きよめられるが、後者の罪は、磔殺(たくさつ=キリストとともに死ぬこと)の信仰によらなければ解決しない。

◆罪は単なる倫理上の問題ではなく、「ただあなたに」とあるように人格的な問題である。サウルとダビデの悔い改めを比較してみよう。Ⅰサムエル13章11～12節、15章30節。

②信仰告白

- a. 「あなたが宣告されるとき、あなたは正しく、さばかれるとき、あなたはきよくあられる」(4節b)
- b. 「あなたは心の真実を喜ばれる」(6節)

(4) 再度の嘆願と確信

- ① 「心の奥に知恵を教えてください」(6節)
- ② 「ヒソブをもって私の罪を除いてきよめ、私を洗ってください」(7節)
- ③ 「楽しみと喜びを、聞かせてください」(「砕かれた骨」とは人間の中心部分のこと)
- ④ 「私の咎をことごとく、ぬぐい去ってください」(9節)
- ⑤ 「きよい心を造り(バーラー=天地創造と同じ力で)、ゆるがない霊(信仰の霊)を私のうちに新しくしてください」(10節)
- ⑥ 「あなたの聖霊を私から取り去らないでください」(11節)
- ⑦ 「あなたの救いの喜びを、私に返し、喜んで仕える霊が、私をささえますように」(12節)
- ⑧ 「血の罪から私を救い出してください」(14節)
- ⑨ 「私のくちびるを開いてください」(15節)

(5) 賛美の誓い・・・(「そうすれば」)

- ①「私は、そむく者たちに、あなたの道を教えます」(13節)・・・伝道、教育
- ②「私の舌は、あなたの義(=救い)を高らかに歌い、私の口は、あなたの誉れを告げるでしょう」・・・賛美、あかし
- ③「神の喜ばれるいけにえは、砕かれた魂、砕かれた、悔いた心。神よ。あなたはそれをさげすまれません。(=私はそのいけにえをささげます)」(17節)・・・礼拝
- ④「全焼のいけにえ・雄の子牛をあなたの祭壇にささげましょう」(19節)・・・献身、礼拝

(6) とりなしの祈り

「ご恩寵によりシオンにいつくしみを施し、エレサレムの城壁を築いてください」(18節)
 ◆「城壁を築く」とは、いくつかの意味が重なっている。神の代理者としての王ダビデの霊と心の城壁が再び築かれることによって、シオンに神の祝福が注がれること。また国全体が外敵から守られることをとりなしている。一国のリーダーとして非常に重要なとりなしである。

4. 嘆願することの重要性・・・賞賛された信仰

◆スポルジョンは「いつも嘆願すべきことがあるようにしよう。嘆願こそ祈りの真髄なのだから。ふさわしく嘆願する人こそ神に聞き入れられる秘訣を知っている人である。」と述べている。

- ① マタイ 8章 5～10節・・・自分の部下のいやしを願った百人隊長
- ② マルコ 2章 1～5節・・・中風の者をイエスのもとに連れて行った4人の者たち
- ③ マルコ 5章 25～34節・・・12年間長血をわずらった女
- ④ マルコ 7章 24～30節・・・悪霊につかれた自分の娘のいやしを願った女
- ⑤ ルカ 10章 46～52節・・・らい病をいやされて感謝しに帰ってきたサマリヤ人
- ⑥ ルカ 17章 11～19節・・・盲人のバルテマイ

5. 嘆きのうたにおける神の不在経験とその意味

(1) 嘆きのうたにみられる神の不在

◆詩篇 22篇、あるいは 31篇にも言えることであるが、嘆きの詩篇においてはしばしば主の臨在感と不在感(=神が遠くにおられる感じがして、祈っても答えられないという不在感)が交錯している。これはいったい何を意味するのか。

(2) 神の不在経験の意義

◆神の不在と臨在は、私たちの祈りを、より人格的な本物の経験とするために神が備えられるものと言える。神はある意図をもって、しばしば私たちから少し離れたところに身を置かれる。神の不在は、神が聖であり、神のご性質やみこころについての私たちの狭い見方とはいかにかけ離れたお方であるかを教えてくれる。なぜなら、身近であるゆえに、その偉大さに気づかず、むしろ神をないがしろにしてしまう可能性があるからである。神の臨在を感謝するために、むしろ神の不在を経験する必要がある。神の臨在と不在の経験によってもたらされるリアリティは、私たちの幻想を打ち砕いて神に対する真の信仰を強めることにある。神の光と闇とが、私と神との関係を浅瀬からより深いところへと導いていく。自分のうちにある暗い感情に気づいて落胆したり、落ち込んだりしてしまうのではなく、それまで持っていた自分自身に対する幻想から解放されて、もっと神に柔軟にされることで、自己からの解放という現実を、よりはっきりと味わいつつ、内なる暗闇から抜け出すことができるのである。神の不在を個人的に経験することで、結局私たちは神の臨在をより深く新しく感謝できるところへと導かれる。ここに神の不在経験の意義があるといえよう。

◆神の不在感を乗り越えさせるキーワード・・・「祈りを神は聞かれる、答えられる」

- ①「あなたは私に答えてくださいます」(詩篇 22篇 21節 b)
- ②「しかし、あなたは私の願いの声を聞かれました」(詩篇 31篇 22節 b)

(3) 南北戦争に従軍したある無名兵士が記した詩・・・『祈りはことごとく答えられた』

私は、目的の達成を願って力を願い求めた。
しかし神は、謙遜に従うことを学ぶようにと、私を弱くされた。

私は、もっと大きなことができるようにと、健康を願い求めた。
しかし神は、よりすぐれたことをするようにと、私に病を送られた。

私は、幸せになりたいと豊かさを願い求めた。
しかし神は、賢くなるようにと私を貧しくされた。

私は、人の賞賛を得ようと、力を祈り求めた。
しかし神は、神の必要を覚えるようにと、私に弱さを与えられた。

私は、人生を大いに楽しもうと、あらゆるものを祈り求めた。
しかし神は、あらゆることを喜べるような人生を私に与えられた。

求めたものは何一つ受け取らなかったが、その祈りはことごとく答えられたのだ。
すべての人々の中で、私は何と豊かに祝されていることが。

本論 3

1. 礼拝への招き(呼び掛け)の詩篇とその特徴

◆詩篇の中には、人々を礼拝へと招いて(呼び掛けて)いる詩篇がある。その数、約 30 である。モーセの幕屋で言えば、入り口の部分である。これらの詩篇は、単なる招きで終始しているだけでなく、神の民が礼拝をどのように理解し実践しようとしていたか、そのライフスタイルとしての礼拝がいかなるものであるかを教えている。

◆チェック作業をしてみよう!! ⇒ (分析)

- ① まず、礼拝への招き(呼び掛け)の詩篇を見つけ出してみよう。
- ② その中から任意のものを選び、以下の項目にしたがってチェックしてみよう。
 - a. 招きの対象 b. 礼拝の対象 c. 礼拝の時 d. 礼拝の場所 e. 礼拝の理由
 - f. 礼拝の方法・手段(心、身体、楽器、犠牲、その他) g. 礼拝の行為(何をするのか)
- ③ 招きの詩篇にみられる賛美の告白(賛美されるべき方がどのような方であるかの信仰告白)をチェックしてみよう。
- ④ 礼拝への招きの詩篇に共通する特徴をまとめてみよう ⇒ [総合]

2. 礼拝の招きの一例 詩篇150篇

◆詩篇 150 篇は、①詩篇の第 5 巻(106~150 篇)の結論、②大ハレルヤ(146~150 篇)の結論、そして③詩篇全体の結論でもある。神の民の選びは、あるいは救いの目的は、神が私たちをして「ハレルヤ」と賛美させることにある。神はこの一つの目的のためにすべてのことをなされると言っても過言ではない。150 篇の最後のことは「息のあるものはみな、主をほめたたえよ。ハレルヤ」である。

(1) 《詩篇 150 篇の構造》

ハレルヤ	賛美の場所	賛美の理由	賛美の方法・手段	賛美の主体	ハレルヤ
------	-------	-------	----------	-------	------

(2) 《説明》

- ① [賛美への呼び掛け]・・・「ハレルヤ」「ほめたたえよ」
 - a. ハレルヤ・・・聖書ではじめて「ハレルヤ」と賛美させたのはダビデであった。ダビデは神の契約の箱をエルサレムの小高い丘に運び込み、そのところに張った天幕の中に安置した。そして神を礼拝させるために、聖歌隊を組織し、「レビ人の中のある者たちを、主の箱の前で仕えさせ、イスラエルの神、主を覚えて感謝し、ほめたたえる(=ハレルヤ)ようにした。」(1 歴代誌 16 章 4 節)。ちなみに、ヨハネの黙示録 19 章に見られる天上の礼拝では、礼拝のために造られた四つの生き物と 24 人の長老たち、そして無数の御使いたちと聖徒たちによる大ハレルヤ・コーラスが響いている。
 - b. 「大ハレルヤ詩篇」といわれる 146~150 篇までは、すべて「ハレルヤ」で始まり、「ハレルヤ」で終わっている。これは私たちの生涯(あるいはすべての状況)において、神は賛美されるべき唯一のお方であり、あらゆる時に、あらゆる場所で、あらゆる方法で、賛美を受けるにふさわしい方であることを表わしている。
- ② [賛美の場所]・・・「神の聖所」「御力の大空」
 - a. 神の聖所・・・地上の幕屋、神殿、シオン。聖所は全地、全世界の中心と考えられた。
 - b. 御力の大空・・・天にある御座、およびその周辺

- ③ **〔賛美の理由〕** ・ 「大能のみわざ」「すぐれた偉大さ」
 a. 大能のみわざ ・ i. 創造の神のみわざ ii. 救済史における神のみわざ iii. 贖いのみわざ
 b. すぐれた偉大さ ・ 神の比類なき属性 (i 絶対的属性 ii 相対的属性 iii 道徳的属性)
- ④ **〔賛美の方法〕** ・ ・あらゆる楽器を用いて
 a. 主を賛美するために礼拝においてさまざまな楽器を用いたのはダビデが最初である。
 b. ダビデは熟練した演奏を要求したが、それはあくまでも賛美のための手段である。
 c. 今日まで残っているのは、「ショーファー」(角笛)のみである。離散以後は声楽の優位。
- ⑤ **〔賛美の主体〕** ・ ・「息あるものすべて」

3. 詩篇95篇にみる礼拝観

(1) はじめに

- ① 詩篇は言うまでもなく、礼拝に富んでいる。なかでも詩篇95篇は礼拝をささげるとい
 うことがどうということかについて多くの教えている。この詩篇は、神への礼拝に招く詩
 篇として、古くから教会で用いられてきた。
- ② この詩篇は前半の〈礼拝への招き〉(多くの場合、最初の招きの部分しか読まれないが)と
 ともに、後半の〈厳しい警告〉がある。その双方があって、初めて礼拝が成立するという
 ことをこの詩篇は教えている。
- ③ 前半には二つの礼拝への招きがなされている。

(2) 二つの礼拝への招き

- ① 最初の招き(1～5節) ・ ・ 《喜びにあふれた賛美》
 「さあ、主に向かって、喜び踊ろう。われらの救いの岩に向かって、喜び叫ぼう。」(1節)
- a. 礼拝において、私たちがしなければならないことは、主を喜ぶことである。「喜ぼう」
 「喜び歌おう」とあるように、「喜ぶ」という動詞が3回出てくる。主に向かって喜
 ぶのである。これは感情の問題ではなく、状況にかかわらず、主に向かって「喜ぶ」
 という神への意志の問題である。
- b. 礼拝における心構えは、どんなときも、主に対して、感謝をもって、喜び叫ぶこと
 である。受けることではない。祝福を求めることでもない。神が聖なるお方として、
 最高の価値あるお方として、賛美と感謝と喜びのいけにえをささげること、それが
 礼拝なのである。時には、詩篇62篇1節、65篇1節にあるように、神の御前に
 静かに、沈黙して礼拝することもある。しかしここでは公けの礼拝、大いに華やか
 で賑やかな態度で神に近づくことがふさわしいのである。
- c. その理由は(3、4、5節)
 i. 大いなる王だから
 「大いなる」とは最上級の方、最高の比べようもないお方。
 ii. 全地の支配者だから
 主が全世界を支配しておられるということは、すべてが主の御手の中に、つまり
 主の主権の下にあること意味する。
 iii. 全宇宙の創造者だから
 すべてのもののいのちの源。すべてのものの所有者。
- ② 第二の招き(6～8節) ・ ・ 《畏敬の念をもった礼拝》
 「来たれ、ひれ伏そう。私たちを造られた方、主の御前にひざまずこう。主は私たちの神。」
- a. 神への畏れを表わす三つの身体的な姿勢
 ◆ いずれも神の御前に身を低くすることへりくだる行為である。
 「伏し拝む」「ひれ伏す」「ひざまずく」 ・ ・ ヨハネの黙示録5章の礼拝の姿勢を参照。
 ◆ 私たちは自分の問題が大きくなり、信仰がなくなるわけではないが、しばしば神

詩篇の世界へようこそ

を見失っていることがある。「主よ。なぜですか」と迫っても、十分な答えがないことがある。しかしヨブのように神の御前に完全に降伏することである。

b. その理由

◆神は私たちの羊飼いであるから。詩篇23篇には羊飼いが羊に対してどのような方であるかがあかしされている。

(3) 《忠実・従順な思いをもった礼拝》(7節後半～11節)

①突然の変化の意味するところ

- a. 詩篇はここで突然変化するため、戸惑いを覚える。しかし、実はこれこそ礼拝に不可欠な要素なのである。「きょう。もし御声を聞いたら・・・あなたがたの心をかたくなにしてはならない。」(7b節～8節)
- b. ここにイスラエル人の礼拝の理解がよく表わされている。つまり、ここでは礼拝は主にささげるだけではなく、主の御声を聞くことである。聞くことは従うことと同義である。ここには、神への不従順と不信仰によって、イスラエルの民は安息に入ることができなかった実例が記されている。

②今日的応答の責任

- a. 私たちの責任を一言で言うならば、「心をかたくなにしてはならない」ということである。みことばに対して **Say, Yes** と言えるかどうかが問われる。
- b. 安息に入る原則は現代においても変わらない。「きょう」という日に、みことばに対して聞き従うことである。

4. 礼拝(賛美)への招きの詩篇の諸要素

◆以下の表は、あくまでも構成要素であり、必ずしもこの構成順というわけではない。ここには「～してください」という嘆願はほとんど見られない。(◎印は頻度を示す)

本論 4

1. 詩篇に見る信仰告白

(1) すべての詩篇に共通する構成要素

- ① 「嘆きのうた」「賛美のうた」「礼拝への招きのうた」「感謝のうた」「信頼のうた」「教訓・知恵のうた」等に共通する大切な要素として「**信仰告白**」があげられる。それは神が自分にとっていかなるお方であるかの告白である。信仰の告白は、「嘆きのうた」では勝利の転換点となり、《賛美のうた》では神の臨在がより強く現わされる力となる。
- ② 私たちに対する神のみこころの一つは、私たちがさまざまな問題や心配事に取り囲まれたとしても、神からのシャロームを経験することである。それを「主にある安息」と呼ぼう。換言すれば、「聖書にある神の約束を信じて安息する生活」である。聖書の中には約7千もの神の約束が与えられている。それは私たちが日々神の約束に囲まれて、思い煩うことなく、失望落胆することなく、神のシャロームを経験して主の安息を楽しむためである。

神の約束+信仰=信仰告白⇒**主にある安息**

神の約束+不信仰=つばやき⇒**不安・恐れ**

- ③ 「主にある安息」の習慣化、それは〔神の約束+信仰=信仰告白〕を繰り返し、繰り返し宣言することである。詩篇の作者は、嘆きのとき、感謝と賛美のときにも信仰を告白し続けたことによって主にある安息を経験したのである。

(2) 《信仰告白の表現形式》

① 「……の方(神)」という表現形式

- a. 〔王なる神、創造者なる神）・・・主権、統治、支配、さばき、至高、超越、偉大さ
 - 「天の御座についておられる方」(2:4, 123:1)
 - 「大いにあがめられる方」(47:10)
 - 「大いにほめたたえられるべき方」(48:1, 96:4, 145:3)
 - 「あなたのご自身の聖なる所におられ、恐れられる方」(68:35)
 - 「恐るべき方」(76:7,11)
 - 「ケルビムの上の御座に着いておられる方」(70:5, 80:1)
 - 「イスラエルの賛美の上に座しておられる方」(22:3) 「ほむべき方」(119:12)
 - 「シオンに住む・・・方」(9:11) 「エルサレムに住む方」(135:21)
 - 「いと高き方」(7:17, 9:2, 50:14, 78:17)
 - 「全地の上にありますいと高き方」(83:13)
 - 「正しい審判者、日々、宣告を下す神」(7:11) 「さばく方」(75:7)
 - 「大いなる方」(48:1, 86:10, 96:4, 99:2, 135:5, 145:3)
 - 「まことに偉大な方」(104:1) 「イスラエルの聖なる方」(78:41)
 - 「天と地を造られた方」(115:15) 「英知をもって天を造られた方」(115:15)
 - 「天と地と海とその中のいっさいを造った方」(146:5)
 - 「地を水の上に敷かれた方」(136:6) 「大いなる光を造られた方」(136:9)
 - 「昼を治める太陽を造られた方」(136:8) 「夜を治める月と星を造られた方」(136:9)
 - 「神の神であられる方」(132:2)
 - 「王の王であられる方」(136:2)
 - 「ただひとり、大いなる不思議を行われる方」(136:6)
 - 「くすしいわざを行われる方」(77:14, 86:10)
 - 「国々の民の中に御力を現わされる方」(77:14, 86:10)
 - 「すべての神々にまさって恐れられる方」(96:4)

詩篇の世界へようこそ

「地上のただ中で、救いのわざを行われる方」(74:12)
 「雲に乗ってこられる方」(68:4)
 「昔から、いと高き天に乗っておられる方」(68:33)

b. 「贖い主、牧者なる神」

「私のかしらを高く上げてくださる方」(3:3)
 「私のために復讐する方」(18:48)
 「敵から私を助け出される(救いだされる方)(18:48)
 「悩む者を、・・強い者から救い出す方」(35:10)
 「私たちの敵を踏みつけられる方」(60:12)
 「あなたは私の助け、私を救う方」(70:5) 「私を助け出す方」(40:17)
 「私を母の胎から取り出した方」(22:19, 71:6)
 「母の乳房に抛り頼ませた方」(22:19)
 「私のために、すべてを成し遂げてくださる神」(57:2)
 「私の恵みの神」(59:17)
 「祈りを聞かれる方」(65:2)
 「力と勢いと御民にお与えになる方」(68:35)
 「ヨセフを羊の群れのように導かれる方」(80:1)
 「私(王)の民を私に服させる方」(144:2)
 「あなたこそ、私の道を知っておられる方」(142:3)
 「とこしえまでも真実を守り、しいたげられる者のためにさばきを行ない。飢えた者にパンを与える方」(146:5~6)

②「神(主)は、私の・・・」という表現形式

◆「私の」が「わが」と訳される場合も含む。また複数の「私たちの」も含まれる。さらに「主は(神は)」が「あなたは」となっている場合もこの表現形式に含まれる。

主は「私の盾」(3:3, 18:2, 28:7, 33:20, 59:11, 84:11, 115:9~11, 144:2)
 「私の巖(岩)」(18:2, 31:3, 42:9, 71:3, 144:1) / 「心の岩」(73:26)
 「私のやぐら」(18:1, 61:3, 62:2, 144:2)
 「私のとりで」(9:9, 27:1, 31:1, 46:7, 59:9, 16,17, 94:22, 144:2)
 「私の避け所」(46:1, 61:3, 62:8, 71:7, 73:28, 91:2, 94:22, 142:5)
 「私の隠れ場」(32:7, 91:1, 11:114)
 「私の助け」(27:9, 33:20, 46:1, 63:7, 94:17, 115:9,11, 119:17)
 「私の力」(18:1, 28:7, 31:2, 43:2, 59:9, 81:1, 118:14)
 「私の望み」(39:7, 62:5, 71:5, 146:5)
 「私の栄光」(3:3, 62:7)
 「私の恵み」(59:10, 144:2)
 「私の救い」(27:1, 38:22, 42:11, 43:5, 62:2, 118:14)
 「私の羊飼い」(23:1)
 「私の王」(44:4, 47:6, 84:3)
 「私の味方」(56:9, 118:6)
 「私の信頼の的」(71:5)
 「私の泉」(87:7)
 「私の光」(27:1)
 「私のほめ歌」(118:14)
 「私の救いの角」(18:2)
 「私の救いの力」(140:7)
 「私の逃れ場」(59:16)

2. 詩篇91篇に見る信仰告白

(1) 告白の力

◆詩篇における信仰告白は、詩篇を構成するきわめて重要な構成要素である。神が自分にとっていかなる方であるかという告白をするとき、信仰の霊が働き、神の力が現実に表わされていく。神から来る希望に満たされ、平安が支配する。信仰が失われれば、必ず、恐れや不安、疑いが私たちの心の中を支配するようになり、力を失い、失望に陥ることになる。それゆえ、信仰の告白はきわめて重要なのである。使徒パウロも「人は心に信じて義と認められ、口で告白し救われるのです」(ローマ10章10節)と述べている。

◆この詩篇に見られる信仰告白は「わがく**避け所**」(2、9節)、「わがく**とりで**」(2、4節)、「主の**大盾**」(4節)、「そして**隠れ場**」(1節)は神の**陰**(1節)であり、神の**住まい**(9節)と同義である。いずれも、神の守り、保護、安全をあらわす比喩である。これらの比喩は、神の守りに対する絶対的信頼と主の御翼のもとにあるやすらぎを意味している。詩篇にはこの他にも**【守りの詩篇】**と呼ばれるものが数多くある。たとえば、27篇、46篇等。

◆第二次世界大戦の頃、イギリス軍にウイットゼイ大佐という人物がいた。彼の率いる連帯は全員が毎日朝晩、詩篇91篇を朗読して神に安全を願ったそうである。彼の連帯は5年間激戦地で戦い続けた。他のほとんどの連帯は全滅したり、多数の死者を出したりしていた。ところが彼の連帯だけは一人の死者も出なかったという。・・このあかしを讀んだ The VIP Club の佐々木満男氏(弁護士)は、「これはすごい、私もやってみよう」と思い立ち、自分の家で、毎晩、就寝前の祈りのときに唱えることを実行した。すると「主は避け所」という真理が単なる精神論ではなく、現実・実際のものであることを体験するようになった、とあかししている。(月刊誌「羊群」1998/8)

◆私たちが詩篇91篇2節のみことばを、信仰をもって告白し、自分自身と家族のために、教会につながる一人一人のために日々**《守りの垣根》**を張り巡らせよう。ヨブの繁栄を憎み、彼を攻めようと企てたサタンは、神に「あなたは彼と、その家のすべての持ち物との回りに、垣を巡らしたではありませんか」と訴えた(ヨブ記1章10節)。しかしそれがはずされたとき、ヨブは様々な災いに見舞われることとなった(13節以下)。使徒パウロも「神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」と、だれも敵対することができないのだという確信を述べている。^{*2}⇒「**自滅の原則**」

(2) 告白の比喩

◆ところで、神の守りや保護を表わす比喩として、「盾(大盾)、巖(岩)、やぐら、とりで、避け所、隠れ場、味方、逃れ場」などがあげられる。91篇に使われている盾の意味を取り上げてみよう。

盾 「わが(私の)盾」(18:2, 28:7, 33:20, 84:11, 115:9~11, 119:114, 144:2)
 「主は、私の回りを取り囲む盾」(3:3)
 「私の盾は神にあり」(7:10, 89:18)
 「主はすべて敵に身を避ける者の盾」(18:30)
 「あなたは正しい者を祝福し、大盾で囲むように愛で彼を囲まれます。」(5:12)
 「主の**大盾**は、大盾であり」(91:4)

◆盾には大盾と小盾の二種類があった。大盾はおもに槍を持つ者が携帯し、戦士の上から下まで全身を覆うほどのものであった。小盾はおもに弓を引く者が用いた。神はアブラハムに対して「わたしはあなたの盾である」と言われた。神のイスラエルに対しても「主はあなたを助ける盾」であると言われる(申命記33章29節)。また主はダビデに対しても盾であった。彼を一介の羊飼いかから王として召し、様々な苦難から救い、永遠の契約を与えて下さったからである(詩篇89篇20~37節参照)。

◆盾は、迫りくる敵に対する保護を意味する。盾なる主を貫いてまで近づく敵はない。アブラハムもダビデもその神の盾を経験した。特に、ダビデは息子アブシャロムの謀反によって都落ちし、すべてを喪失したかにみえたときにも、ダビデは「私は身を横たえて眠る。私はまた目をさます」(3篇5節)とあかししている。身を横たえることはだれにでもできるが、問題は安

らかに眠れるかどうかである。ある意味で人生の多くの営みはそれを求める営みといえる。

◆「大盾」「とりで」は、親鳥が羽を広げてひなを抱きかかえる有様と似ている。「隠れ場」(91篇1節)も神の翼の下。「陰」(同、1節)も鷲にたとえられた主の翼の陰のことである。また「避け所」(同、2節、9節)も同類語である。

(3) 神の守りの領域

◆この詩篇には数々の領域における守りが約束されている。

- ① 「狩人のわな」・・・サタン戦略、誘惑、悪賢い敵意、卑劣な攻撃
- ② 「恐ろしい疫病」・・・文字通りの疫病、大失敗という疫病、習慣的な罪という疫病
- ③ 「夜の恐怖」「昼の飛び来る矢」・・・不安や疑い、悩み、思い煩い、すべての恐れ
- ④ 「わざわざ」「えやみ」・事故、病気、災い
- ⑤ 「すべての道で」・・・人生の歩み、生活のすべての領域において、文字通り、例外なく

◆この詩篇には数々の方法による守りが約束されている。

- ① 神ご自身(4節)
- ② 御使い(11節)

(4) 「主を避け所とする」「主を住まいとする」

◆この主の守りは、決して自動的ではないことを心に留めなければならない。主がすばらしい避け所であったとしても、私たちがそこに入って留まらなければ、主の守りを得ることはできない。敵の激しい攻撃にさらされている試練のときこそ、しっかりと避け所としての主に対して「私は主に申し上げよう『わが避け所、わがとりで、私の信頼するわが神』と告白し、「いと高さ方を、あなたの住まいとして」その中にとどまりつづけなければならない。

(5) 神の誓い(I will)

◆そうするなら、神自ら誓ってくださるのである。神の **I will** に注目せよ。

91:14 彼がわたしを愛しているから、わたしは彼を助け出そう。 彼がわたしの名を知っているから、わたしは彼を高く上げよう。

91:14 "Because he has set his love upon Me, therefore **I will deliver** him; **I will set** him on high, because he has known My name.

91:15 彼が、わたしを呼び求めれば、わたしは、彼に答えよう。 わたしは苦しみのときに彼とともにいて、彼を救い、彼に誉れを与えよう。

91:15 He shall call upon Me, and **I will answer** him; **I will be with** him in trouble; **I will deliver** him **and honor** him.

91:16 わたしは、彼を長いのちで満ち足らせ、わたしの救いを彼に見せよう。

91:16 With long life **I will satisfy** him, **And show** him My salvation."

◆なんという主の誓い、力強い約束であろうか。主の至れり尽せりの守りのゆえに感謝しよう。

◆神の「守りの垣根」を巡らすということを経く考へてはならない。私たちは日々、神を住まいとし、神を愛しているかどうか、神の名を知っているかどうか、神を呼び求めているかを点検しよう。「主よ、あなたは私の避け所、わたしのとりで、私はあなたを信頼します。あなたは私の神です。」と日々告白しよう。そうするなら、その告白したとおりのお方として私たちにかわってくださるのである。

Praise the Lord !!

本論 5

1. 《嘆きのうた》と《賛美のうた》との関係

(1) 賛美の誓いの重要性

◆詩篇の類型としての「嘆きのうた」、「賛美のうた」、「礼拝への招きのうた」、「感謝のうた」、「信頼のうた」、「教訓・知恵のうた」、等に共通する大切な要素として「**信仰告白**」があることを本論④で取り上げた。この信仰告白に基づいて「**賛美の誓い**」がなされている。ところで、この「**賛美の誓い**」が〈嘆きのうた〉と〈賛美のうた〉、あるいは〈信頼のうた〉、〈教訓のうた〉といった他の類型との関係はどうであろうか。それを検証してみよう。

個人・共同体の 〈嘆きのうた〉	個人・共同体の 〈賛美のうた〉	〈信頼・感謝のうた〉	〈教訓のうた〉
呼び掛け 嘆 願 信仰の告白 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">賛美の誓い</div> → とりなしの祈り	呼び掛け <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">賛美の誓い</div> (告白的) <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">賛美への招き</div> (記述的) 信仰の告白	 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">賛美の誓い</div> 信仰の告白	 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">賛美の誓い</div> 信仰の告白

◆上記の図は、《嘆きのうた》の中でなされた「**賛美の誓い**」が、《賛美のうた》《信頼と感謝のうた》、および《教訓のうた》においては最も重要な位置を占めていることを示している。

◆ダビデは賛美が好きだったから賛美したのではない。彼は主に「**賛美の誓い**」をしたから賛美したのである。このことはきわめて重要である。

2. 《賛美の誓い》

(1) 表現形態

◆「**賛美の誓い**」は、日本語訳では「私は(主に)~しよう」「私は(あなたに)~します」「私は(あなたに)~しましょう」と表現されている。英語では、**I will**・・・と表現されている。

◆英語のコンコルダンス、あるいは「J-ばいぶる」で詩篇における **I will** を検索してみよう。

I will

pray (5:2, 55:17,)・・・ 祈ります うめきます

direct(5:3)・・・ 備えをします

look up(5:3)・・・ 見張りをいたします

come (5:7,)・・・ 行きます

worship (5:7, 138:2)・・・ ひれ伏します

praise (7:17, 9:1, 9:2, 22:22, 28:7, 35:18, 43:4, 52:9, 54:6, 56:4, 56:10, 57:9, 69:30, 71:22, 86:12, 108:3, 109:30, 111:1, 118:19,21,28, 119:7,11, 138:1, 139:14, 145:2, 146:2)

ほめたたえよう 感謝します 感謝しましょう 賛美しましょう

詩篇の世界へようこそ

- sing praise** (7:17, 9:2, 27:6, 57:7, 61:8, 101:1, 104:33, 108:3)
ほめ歌おう ほめ歌を歌いましょう
- sing** (13:6, 27:6, 57:7, 57:9, 59:16, 59:17, 71:22, 89:1, 101:1, 104:33,
108:1,138:2, 144:9, 146:2) ・ ・ ・ 歌を歌います
- tell** (9:1) ・ ・ ・ ・ 語り告げます
- be glad in**(9:2, 31:7, 104:34) ・ ・ 喜びます 楽しみます 喜びましょう
- rejoice**(9:2, 9:14, 31:7, 63:7) ・ ・ 誇ります 歓声をあげましょう 喜びます
- bless**(16:7, 34:1, 63:4, 145:1,2) ・ ・ ほめたたえます ほめたたえましょう
- love** (18:1) ・ ・ ・ 慕います
- call (upon)** (18:3, 55:16, 86:7, 116:2, 13,17) 呼び求めます 呼ばわります
- see** (17:15) ・ ・ 仰ぎ見ます
- give thanks** (18:45, 30:12, 35:18,) ほめたたえます 感謝します
- declare** (22:22, 38:18, 66:16, 75:9, 145:6)
語り告げます 言い表します 語ろう 告げよう 述べるでしょう
- pay(my vows)** (22:25, 66:13, 116:14) ・ ・ ・ 誓いを果たします
- fear no(not fear)** (23:4, 56:4, 118:6) ・ 恐れません
- dwell** (23:6) ・ ・ ・ 住まいましょう
- wash** (26:6) ・ ・ ・ ・ ・ をあらってきよくしましょう
- go** (26:6, 43:4, 66:13, 70:16, 118:19) 歩き回りましょう 行きましょう 入ろう
- walk** (26:11, 86:11, 101:2, 116:9, 119:45) ・ 歩みます 歩き進もう
- be confident** (27:3) ・ ・ ・ ・ 動じません
- offer** (27:6, 66:15, 116:17) ・ ささげます
- seek** (27:8, 122:9) ・ ・ ・ ・ 慕い求めます 求めよう
- cry** (28:1, 57:2, 61:2) ・ ・ ・ 呼ばわります
- extol** (30:1, 145:1) ・ ・ ・ ・ あがめます
- confess** (32:5) ・ ・ ・ ・ 告白しよう
- remember** (42:6) ・ ・ ・ ・ 思い起こします
- say** (42:9, 91:2, 122:9) ・ 申し上げます 申し上げよう
- not trust** (44:6) ・ ・ ・ ・ 頼りません
- incline** (49:4) ・ ・ ・ ・ 耳を傾けよう
- disclose** (49:4) ・ ・ ・ ・ 説き明かそう
- teach** (51:13) ・ ・ ・ ・ 教えましょう
- wait** (52:9, 59:9) ・ ・ ・ 待ち望みましょう 見守ります
- sacrifice** (54:6) ・ ・ ・ ・ (いけにえを)ささげます
- trust** (55:23, 56:3, 61:4) ・ 抛り頼みます 信頼します
- render** (56:12) ・ ・ ・ ・ ささげます
- make my refuge**(57:1) ・ ・ ・ 身を避けます
- awaken** (57:8, 108:3) ・ ・ ・ 呼び覚ましたい
- abide** (61:4) ・ ・ ・ ・ ・ 住みます
- magnify** (69:30) ・ ・ ・ ・ あがめます
- hope** (71:14) ・ ・ ・ ・ ・ 待ち望みます

make mention (71:16)	心に留めましょう
cut off (75:10)	切り捨てよう
remember (77:11)	思い起こそう
meditate (77:12, 119:15, 119:48,78, 145:5)	思い巡らそう 思いを潜めましょう
open (78:2)	口を開き語ろう
utter (78:2)	物語ろう
hear (85:8)	聞きます
glorify (86:12)	あがめましょう
triumph (92:4)	喜び歌います
behave (101:2)	心を留めます
destroy (101:8, 118:10,11) .	滅ぼします 断ち切ろう
take up (116:13)	(杯を)かかげます
exalt (118:28)	あがめます
keep (119:8,69,106,115,145,146)	守ります
delight (119:16, 119:47)	喜びとします
not forget (never forget) (119:16,98)	忘れません
run (119:32)	走ります
speak (119:46)	述べます
rise (119:62)	起き上がります
lift up (121:1)	(~を)上げます
consider (119:95)	聞き取ります

結論

〔詩篇の世界を生きる — それは神を知る祈りの旅である〕

1. 祈りの旅における嘆きと賛美

◆詩篇の主題、それは<嘆きから賛美へ>である。この方向付けを私たちにもたらせることのできる神の主権と啓示があることを知らなければならない。

◆詩篇を生んだ旧約のイスラエルの民、彼らの神体験は、エジプトで奴隷であった彼らを神が救い出してくださった出エジプトの経験に土台を置いている。

「主は仰せられた。『わたしは、エジプトにいるわたしの民の悩みを確かに見、追い使う者の前の彼らの叫びを聞いた。わたしは彼らの痛みを知っている。わたしが下って来たのは、彼らをエジプトの手から救い出し、その地から、広い良い地、乳と蜜の流れる地・・に、彼らを上らせるためだ。』」 (出エジプト3章7～8節)

◆イスラエルの経験は偶像を崇拜する支配者のもとで奴隷となっていた。現代に生きる私たち

詩篇の世界へようこそ

も同様に、偶像礼拝の奴隷となっており、神と出会うまでは、解放されて自分の神として神をすることはできない。自分のことにのみ捕らわれている限り、神は私たちに無関心なお方として思えるのである。しかし、神を真剣に考え、心から求めるようになると、神が私たちのことを真剣に考え、個人的に答えてくださることが分かるようになる。エジプトの奴隷たちが神に叫んだとき、神は彼らの悩みを見、叫びを聞かれ、彼らを助け出すために下ってこられたのである。同様に、神は私たちの状況を知り、個人的な必要に応えてくださる方なのである。

◆そして、解放されたイスラエルの民は、喜びと感謝に満たされ、賛美の歌を歌ったのである。
「主に向かって私は歌おう。主は輝かしくも勝利を収められ、馬と乗り手とを海の中に投げ込まれたゆえに。主は、私の力であり、ほめ歌である。主は、私の救いとなられた。この方こそ、わが神。私はこの方をほめたたえる。私の父の神。この方を私はあがめる。」
 (出エジプト 15章 1～2節)

◆このように神に救いを見出した者はみなこのように神を賛美するようになる。しかし、神を知る祈りの旅は、決して近道ではないことに気づきはじめる。すべての問題から自由にされるどころか、誘惑や試みに満ちた実に長い祈りの旅がはじまるのである。この祈りの旅の中で、彼らが、日々の生活の中で神の愛と真実に対してどのように応答してきたか、その結晶が詩篇なのである。それゆえ、詩篇には長い期間をかけて実にさまざまな祈りと賛美が収録され、あるものは賛美にあふれ、あるものは絶望的であり、またあるものは神によってもたらされる礼拝者としてさまざまな心の変化を映し出している。

◆たとえば、「私はあらゆる時に主をほめたたえる。私の口には、いつも、主への賛美がある。」(34篇 1節)とあるように、私たちの生活のすべてにまさって神を優先させ、神を愛し、すべての喜びと幸せをあかしし、それを共に見出すようにと招く〔**賛美と礼拝の詩篇**〕もあれば、私たちの魂が方向性を見失ってしまったときの詩篇、つまり〔**嘆きの詩篇**〕もある。物事が順調なとき、私たちの魂はしばしば虚ろになり、自己満足に陥り、神の憐れみから遠ざかる危険性がある。そんなとき神は私たちをしばらくの間、激しい感情や混乱の中を通されることで、私たちが神の前で、嘆く以外にないようにされるのである。詩篇にはこの種の祈りが多いといえる。

◆嘆きの詩篇の中で、絶望的な状況をどうかしてくださいと神に嘆願する。真剣に神の名を呼び、深い苦しみや激しい怒りをぶつける。神がそうした状況を許していることを非難することばもしばしば見られる。作者は、強い言葉で、感情をあらわにしながらか、神がすぐでも決定的な形で働かれるようにと嘆願する。ある意味で、このようなタイプの祈りは浄化(カタルシス)の働きを持っているといえる。もし、自分の内にあるストレス、抑圧された感情(苦々しい気持ち、隠された怒り、否定的な感情)をそのままにしているならば、さらなる苦しみを自ら抱え込むことになるからである。こうした感情を神に向かってあらわにしていくとき、祈りの生活は、より充実したものへと成長していくのである。

◆祈りの生活において、方向性を失った私たちの魂が再び神への方向づけが与えられるとき、私たちの祈りは「～してください」式の叫びを脱した世界に導かれるようになると信じる。

◆祈りの旅は、まず土台となる信仰の確信から始まり、方向性を見失うところを通して、ついに再び方向づけが与えられる。こうした経験の繰り返しを通してはじめて、全生活が神とつながるようになるのである。嘆きは感謝と賛美に代わり、自分のための願いは他人のためのとりなしに代わっていく。自分への関心の代わりに、今は神の栄光に対する深い思いが与えられる経験をすることになる。

◆祈りの旅は、この世が成功と考えるようなサクセス・ストーリーを生きることではない。私たちはしばしば、病の中で、あるいは疑い、絶望、孤独、みじめさの中で神を経験することを通して、私たちの魂は神に向けられるようになるのである。不思議なことに、そのようなとき

詩篇の世界へようこそ

にこそ神は私たちに介入され、私たちの態度をつくり変え、新しい霊と心を下さるのである。

◆このとき、私たちは詩篇30篇のようにこういうことができる。

「主よ。私はあなたをあげめます。あなたが私を引き上げ、私の敵を喜ばせることはされなかったからです。私の神、主よ。私があなたに叫び求めると、あなたは私を、いやされました。主よ。あなたは私のたましいをよみから引き上げ、私が穴に下って行かないように、私を生かしておかれました。」(詩篇30篇1～3節)

ここには、神を個人的に知った人のあかしがある。「私はあなたをあげめます」という表現が全く新しい力と喜びの響きを帯びている。なぜなら、そうすべき理由があったからである。

◆詩篇の世界は、神を知るための祈りの旅であり、嘆きは賛美へと変えられていく旅である。たとえ「夕暮れには涙が宿っても、朝明けには喜びの叫びがある」世界である。

2. 詩篇における礼拝用語を自分のものとして生きる

◆ここでいう「礼拝用語」とは、神から人へという方向性ではなく、人から神へという方向性をもった祈りであり、礼拝者としてのライフスタイルを形作る行為、態度である。詩篇はまさに礼拝用語の宝庫である。

◆詩篇の構成は5つに区分されている。これはモーセ五書(創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記)を多分に意識したものと考えられる。聖書注解者デリッチは、モーセ五書は神から民に語りかけられた五書であるとするれば、詩篇は民が神に語りかけた五書であると述べている。詩篇は全体として「人から神へ」の方向性を持っている。礼拝用語の豊かさを知るだけでなく、その豊かさのなかに生きることこそ、礼拝者として大切なことである。

◆礼拝用語(動詞)は完全に人から神に対する全人格的な行為であり態度である。神に対する私たちの礼拝行為や態度を通して、それを受けるべきお方がいかにすばらしいかをあかしする偉大な務めが、神に愛され、神に選ばれた者たちに与えられているのである。

詩篇に見られる数多くの用語を以下のようにまとめたチャートを付記します。(i～iv)

- | | |
|----------------|---|
| (1) [賛美・感謝・喜び] | 賛美します、ほめたたえます、ほめ歌います、歌います、感謝します、ささげます、喜びます、あげめます、誇ります、(栄光を)帰します、(目、手、頭、声を)上げます、(救いを)楽しみます |
| (2) [信 頼] | (主の住まい、主の家に)行きます、身を避けます、抛り頼みます、信頼します、ゆだねます、すがります、愛します、思います(思い巡らします、思い返します) 住みます、歩みます |
| (3) [待望・渴望・祈り] | 待ち望みます、注ぎ出します、慕います、渴きます、呼びます、仰ぎます、祈ります、尋ね求めます、叫びます、申し上げます |
| (4) [服従・従順] | 伏し拝みます、ひれ伏します、ひざまずきます、おののきます、聞きます、仕えます、恐れます |
| (5) [誓 約] | 語り告げます、告げ知らせます、誓います、守ります |